

常照

第841号

本願寺小樽別院

二月の常例布教（ご法話）のご案内

○前期 二月七日（水）～十一日（日）

大阪教区 榎並組 信徳寺

講師 小西善憲 師

○後期 二月十三日（火）～十六日（金）

北海道教区 後志組 照覚寺

講師 佐々木法雨 師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時（法要終了後）～午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話をして頂きます。
どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞に来院ください。
席の間隔を保ち、換気実施の上、お待ちしております。

親鸞改名の時期と課題

親鸞という名は、いつ、誰によつて、何を目的として付けられたのでしょうか。聖人の『教行信証』後序には、法然との師資相承の折、綽空から「名の字」を改めたと記しています。まづ親鸞と名告った時期から考えます。吉水時代の聖人を伝える書物は善信という名で記されています。それを根拠に綽空という法名を善信に改め、流罪の後に自ら親鸞と名告ったというの一般的な了解です。その論拠が『歎異抄』の奥書にあります。

親鸞、僧儀を改めて、俗名を賜ふ。よつて僧にあらず俗にあらず、しかるあひだ、禿の字をもつて姓となして、(中略)流罪以後、愚禿親鸞と書かしたまふなり

聖人は藤井善信(ふじいのよしぎね)という俗名で流罪になり、これ以降、愚禿親鸞と名告ったと確かに読めます。しかし本文の主題は「非僧非俗」です。ので、流罪以後、非僧として姓を愚禿と名告り、非俗として法然からもらった法名である親鸞をそのまま名告ったということではないでしょうか。つまり流罪以後の自ら名告ったのは愚禿という姓のほうです。また近年の研究では、善信は法名ではなく房号で、例えば法然房源空と同様に、善信房綽空から善信房親鸞とする説が提唱されています。房号とは官僧から遁世した聖(ひじり)や沙弥(しゃみ)などの僧が用いた通称のことです。聖人が生きた当時は実名敬避の慣習があり、日常生活では実名を使わずに房号での応対が習いとされてきました。ですから善信房というのは通称です。つまり

『選択集』書写のおよそ三ヶ月後、綽空から善信に改めたのではなく、綽空から親鸞に改めたということ。法名は自ら名告るものではないため、親鸞という法名も法然から与えられたものです。

それでは何故、綽空を改めて親鸞という法名を付けられたかという理由を考えてみます。覚如の『御伝鈔』を見ると、上巻第五段に「選択付属」があり、続く第六段は「信行両座の決判」、第七段は「信心一異の問答」となっています。これら一連の信心に関わる記述が『選択集』書写の後、法然との間で徹底的に議論された内容だと思われまます。

法然は既成仏教界から浄土宗独立を勝ち取ることに心血を注ぎました。そのため善導による『観無量寿経』の伝統に則り、称名念仏の法ひとつを旗印に吉水教団を組織していきます。

親鸞が問題にする個々の信心に言及すれば、時期として教団が成り立たないことはよくわかっていて、あえて取り上げません。つまり法然の生涯をかけた仕事は、一切経の中から浄土三部経を定め、称名念仏の法だけが唯一、末代濁世の現実に生きる凡夫が浄土に往生することができるところであることと証明することでした。このとき既に、やがて起こる国家権力と結びついた既成教団からの批判や弾圧、門弟たちの誤解などを予見していたと思われまます。それに応えるべく授けた名が親鸞です。つまり自分が積み残した仕事を四十歳下の親鸞に託したということです。

親鸞という名はインドの世親と中国の曇鸞から一字ずつもらって付けられたものです。世親は釈尊が説かれた『仏説無量寿経』の教えをよく身につけ、『無量寿経優婆提舎願生偈』

を作り、大乘の菩薩として生きる自らも、一心に阿弥陀仏の浄土に生まれることを願いました。曇鸞は「五濁の世、無仏の時」の凡夫という時機の自覚の上に世親の論書を注釈します。両祖とも『無量寿経』の伝統に立ち、阿弥陀の浄土こそ涅槃の覚り世界であり、本願成就の信心の上はその功德が実現することを論述しています。

つまり親鸞の名で果たした仕事は『無量寿経』・世親・曇鸞の教学によつて、法然の称名念仏による往生浄土の仏教を大乘仏教の土俵の上で再構築したことです。その論書が『教行信証』です。法然の教えを思想的批判し弾圧を加えた教団や、同門の異議に対し、他力の信心の上に涅槃の覚りを感じ得ることを証明し公開する名が親鸞です。

法然から託された仕事を一通りや

り終えた親鸞は晩年、著作や書簡の署名に時折善信と記すようになります。この頃になると親鸞から教化を受けた門弟も多くなります。そうなると法然は念仏で親鸞は信心だと二人の違いを問題にする議論が起こります。そうではない。親鸞が語ってきたことは全て法然から頂いたものであるという師教への回帰が善信という署名に表わされています。

